

Title	J.-J.ルソーの無名時代の著作研究
Sub Title	The study on writings of J.-J. Rousseau in his nameless period
Author	井上, 坦(Inoue, Akira)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1970
Jtitle	哲學 No.56 (1970. 10) ,p.113- 139
JaLC DOI	
Abstract	Recently I have begun to be more aware of the importance and variety of what J.-J. Rousseau (1712-1778) wrote before 1749. Renewed inquiry into the writings of young Rousseau seems necessary to a better comprehension of his later works. But very few readers have paid serious attention to the earlier fragments on history, religion and education; the poems and the long letters to his friends. In these papers, therefore, I try to study these fragmental writings from 1735 to 1742. The vicissitudes of those years are narrated in Books V, VI of the "Confessions." Within this seven years span, two places are decisive in its influence on the intellectual and emotional development of young Rousseau : Les Charmettes and Lyon. The former is the symbol of the lost paradise of man as he moves from nature to society. Rousseau would like to remember the time of Les Charmettes as a heaven of happiness, for it was a time of solitude, of manual work in the garden as well as of intensive work of the mind. The latter was the large city where the opulence of civilization and commerce was displayed. There he taught two children as their tutor and made "project" and "memo" of remarkable value.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000056-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

J.-J. ルソーの無名時代の著作研究

井 上 坦

目 次

- I この論文の対象範囲と研究の意義
- II ルソーの自己評価と勉学計画——父への手紙——
- III 3 箇の断片とレ・シャルメットでの祈り
- IV 若いルソーの読書の方向
- V 歴史への強い関心と三つの根拠
- VI 教育の『プロジェ』と『メモ』の構造分析と説明
- VII 暫定的結語
- VIII 文献表

I この論文の対象範囲と研究の意義

66才で生涯を終えたジャン・ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau 1712-1778) の数多くの著作の中で、この論文の対象となるものはおよそ1735年から1742年まで、即ちルソーが23才から30才までの期間のものである。

この期間にルソーが書いたものは厳密には著作とか作品と呼ばれることはできないかもしれない。それらは未完の断片であり、知人に寄せたところの書簡詩であり、メモである。わずかに『ヴァラン夫人の果樹園』(Le Verger de Madame de Warens) のみが一応まとまった完成体を示しているにすぎない。それらの「書きもの」は後年のルソーの堂々たる著作に比較する時、量的にはもちろんであるが、質的にもまた貧弱の感を受けるかもしれない。これらはまた従来の数多いルソー研究書においても不十分な、簡単な紹介程度にしか扱われていないといえる。

しかし、どの思想家にとっても青春の日々における思想形成は、たとえそれが幼稚であり力弱いものであったにしても、その思想家の思想全体にとって重要な礎石を置くものであろう。ましてここで扱われる時期はすでに指摘したように23才から30才にまで及んでいるのである。それはもはや青春という名で呼ぶにはやや重く深い人生の時期にまで達している。したがって、私たちはこの時期の書きものの中に、たとえ幼稚であり、断片的であり、私的な形であるにせよ、逆にその故にますます生々しく、形をとりつつある一つの思想の新鮮な魅力と価値を見出しうると信じるのである。

しかもルソーという人間にとって、23才から30才までのこの時期は通常の人よりもさらに特別の重要性をもっている。ではこれはどのような時期なのか。『告白録』を読んだ者ならば、この時期を回想するルソーの美しい感動的な文章を忘れないであろう。それは一口でいえば充実した冥想と独学の期間であった。さらにそれはまた、生まれるとすぐ母を失なったルソーにとり、母と恋人の両役をかねていたと思われるヴァラン夫人 (Madame de Warens) との一応かなり安定した関係をえて、情緒生活においてもそれまでにない充足を覚えたであろう年月を含んでいる。

もちろん、これらのシャンベリーとシャルメントでの日々が、『告白録』での回想通りに長期にわたいかつ美しく輝かしい日々であったかどうかは疑問の余地が多い。例えば、最良の日々としてなつかしく回想されている、レ・レシャルメットでのヴァラン夫人との水入らずの生活は、『告白録』からは、1736年夏から秋まで、1737年春、1738年初夏から1740年早春までの3回位に読み取られるが(文6, 上 p. 317, 中 p. 19)、この回数と滞在期間には疑問の点があり、C. F. グリーンの説では滞在は第1回の短かいものにすぎないとされる(文8. p. 57)。またB. ガニユバン、M. レイモンド、A. シャンツなどの推論では短かい滞在が1735~36年か、'36~'37年の間に行われたのみといわれる(文4. p. 1338~1341)。

しかし、グリーンもこの時期のルソーの自己教育については疑っていない。ルソーのこの時期での勉学の努力の事実は、あるいはルソーのことばを借りれば「心情 (coeur) を形成し、精神 (esprit) を培う」点での深い方向づけがなされたことは、否定し難いであろう。

II ルソーの自己評価と勉学計画——父への手紙——

私は青年ルソーの残した様々の書きものの中から興味深いものをなるべく年代順に取りあげて紹介、説明、批判をくわえる予定であるが、1735年ジャンプリーにいるルソーからニヨン (Nyon) にいる実父イサック・ルソーにあてた書簡をまず出発点として取り上げたいと思う。この書簡はこの時点でルソーが自分をどのようなものとみなしていたか、どういう勉強を試みているかを報告している点で重要である (文 I, p. 29~34)。(なお性格の自己分析については第 VI 章における『メモ』の研究で述べられている)。

「親愛なるお父さん」に始まるこの書簡は一応の挨拶をすますと直ちに生活を立てることに関してジャン・ジャックに何ができるかを述べる。「第 1 に私はこれまでかなりやってきた音楽をすることができます。第 2 に私が書く事 (私はスチールについて知っているのですが) について持っている多少の才能が、私に大きな領主の下で秘書の仕事を見つけるのを助けるでしょう。最後に若い素質のある人の教師 (gouverneur) として、あまり経験をもってはいませんが、何年か後には役立つことができるでしょう。」

音楽教師、秘書、家庭教師が自分にふさわしい仕事だというのである。この点に関してジャン・ジャックはさらに詳しく説明を付している。「第 1 の点については、私はいつでもいづらか進歩をしたという賞讃をえてきました。人は十分デリケートな趣味をもっているといってくれます。」そして音楽の意味に触れて「人間は有用なものよりも快適なものを好むように造られています。不正なしに行われうる場合には、人間の弱さによって人

J.-J. ルソーの無名時代の著作研究

間を捕え、それを利用するのが必要です」という風に述べている。「有用な」(utile)と「快適な」(agréable)という啓蒙思想家によって愛用され、ルソーもまた後年の著作でかなり使用していることだが、すでにここで使用されている点が注目される。

続いて第2の秘書への適性について「明確でよく判りやすい文体、多くの正確性と忠実性、事を運ぶ慎重さ、そしてわけても秘密を保つこと」が秘書に必要な才能だが、自分はこれらのいくつかのものは持っている、自信を示している。ルソーは13才でボセーからジュネーブに帰されると直ぐに（この点で「2～3年は将来何になるかをきめられるまで、叔父の家ですごした」という『告白録』の叙述には錯覚があるという（文 8. p. 8） greffier de la Ville（市の登記官）であるマスロン（Masseron）のところへやらされ、代訴やら書記やらの仕事を習わせられた。しかし、この時はマスロンから無能のレッテルをはられてすぐに解雇されている。しかし『告白録』によると、この仕事が実はいやしい手段でふところを肥やすのにもっぱらな、無味乾燥で時間的にも縛られるものだったため、嫌悪感で怠けたからだということになっている（文 6. 上, p. 42～43）。さらに1728年秋にはトリノでグボン公の許で秘書をしている。秘書の仕事にかなり自信のあるのはこういう仕事での経験がある程度役立っているのかもしれない。

第3の若い貴族の家庭教師については「私がやりたいとはあまり思わない状態であることを、ありのままに告白します」と記している。そして、このことが決してルソーの不勉強のための自信欠乏からではないことを釈明して、次のように興味深い陳述をしている。いくらか長くなるが引用してみよう。

「初めに私は二つの原理から成り立つ勉学のシステムを作りました。第1の原理はエスプリを明晰にし、有用で快適な認識でエスプリを飾るすべてのものを含みます。第2の原理は知恵と徳で心情 (coeur) を形成する方法を包含しています。ヴァラン夫人は親切にも私に書物を下さり、私はで

きるだけ進歩するため、また、無駄な結果とならないよう、時間を区切るように努めました。

私はよい風習を培い、誰も純粹性について私を非難できないと信じています。私は宗教を持ち、神を恐れています。しかし、一方では極端な弱さと誰よりも欠点に満ちた主体として、どれほど多くの直すべき悪徳が私のうちにあるかを感じています。しかし、結局は私と同じように悪徳への憎しみと徳への愛をもつ人々の手にまかされる青年達は幸福でしょう。

科学と文学 (les sciences et les belles lettres) を重んじる人々のためにいえば、私はそれらに関して若いジェトル・マンの授業のために必要なことは知っています。さらに申しますと、正確に言えばレッスンを与えることが家庭教師の仕事ではなく、ただ科学と文学が自然に果実を結ぶように配慮することだけがその本来の仕事なのです。もちろん、教師は生徒が学ばねばならないこと以上を、すべての教材について知っていることが必要です。

私はまた、人が私の過去の行為の不規則さについて異議を申し立てるのに答えるものをもっていません。それは弁解不能な事なので、弁解しようとはしません。ですから、お父さん、私は初めに、敢えて誰かの行いを私が引受けるのは何年か後に、もっと経験を積んでからですと述べたのです。これが私を完全に叩き直す計画であり、成功を望んでいるものなのです (文 I. p. 32).」

誠実な自己評価が感銘を呼ぶが、a) 勉学のシステムをエスプリに関するものと心情に関するものに大別する点、b) 教師の役割は直接の知識の授与よりも、生徒の自己発展、成生を助ける配慮にあるとする点、などで後年の著作中での理論の先駆をなす注目すべき見解をすでに述べているのである。

Ⅲ 3 箇の断片とレ・シャルメットでの祈り

私たちは Th. デュフール (Théophile Dufour) のおかげで、ルソーがシ

シャルメット時代に書いたと思われる9箇の草稿あるいは断片を読むことができる(文2, p. 200~236)。このうち5箇はデュフルの推定によれば1735年代に書かれたものである。それらはまさに断片でありメモに似たものであるが、しかし、ルソーの青年時代の思想傾向、思惟方向をうかがわせる点で興味なしとはいえないのである。それらのテーマを順にあげてみると、『女性について』『雄弁について』『サン・デニ通りの家庭』『神について』『女性がひそかな原因となっている重要な事件について』となっている。

ここでは比較的重要と見える1番目、2番目、4番目の断片を取上げてみよう。

断片1) 女性について(文2, p. 202~205)——この断片の内容は女性蔑視論者に対する反論ともいべきものである。ルソーはまずたしかに歴史的に見て偉人は男性に多く女性に少ないことを認める。しかし、これの真の理由を考えると割合は変わってくるのではないかと問うことから省察が始まる。まず第1の女性不利の理由として、ルソーは、暴君であり権力を握っている男性のために女性は自由を奪われていた、という事実をあげる。このことを男性は「えたいの知れない自然法」によって、初めから横奪しているが、実は「大きな暴力以外には根拠がないであろう」というがルソーの第1の論点である。第2点として、ルソーは人間のエスプリ一般の傾向も女性に不利だと指摘する。「エスプリは輝かしいものしか見ず、偉大さと崇高さの中でのみ徳を讃え、服従的、依存的な人間状況の中で、もっと大きなもっとほむべきことをなしうる者すべてを軽蔑する」のである。

この一般的考察の後で、ルソーは歴史上著名な男性と女性、例えば、カトーとルクレチウス、デュノア公爵とジャンヌ・グルクを比較しようと呼びかける。しかしルソーはここでそれ以上に詳細に論評することはしていない。そして一気に結論に入っていく。即ち「男性は数において優るが、市民的(civil)な道徳の全領域での完全なモデルは女性の中に見出される

であろう。」そして「もし女性が私達（男性）が国家の事柄に現在もっているような支配を手にしていたならば、多分女性はもっとヒロイズムと勇気の偉大さを推進し、もっと多くの数を記録したことだろう。」もし不正に女性たちから男性が機会を奪っていなかったなら、「魂の偉大性と徳への愛の偉大な実例」は女性においてもっと男性より多かつたろうと、ルソーはさらに繰返している。

もちろん実証的な面では全くといってよい程不完全であるし、結論の女性弁護も仮定の話にすぎない、といえはそれまでである。しかし、思考の方向から見ると、いくつかの点が意味深いものとして指摘される。1) 男性優位の世界を暴力的起原によるとする点。これは後の『人間不平等起原論』が現存社会体制とそれを支える法秩序を暴力による支配のからくりとして痛烈に批判する論法を先んじて示しているといえる。(2) 人間の偉大性を魂の偉大さと徳への愛という観点から捕えている点。徳の内容はさておいて、徳を最重視し、徳を人間評価の規準とする態度は、『学問芸術論』はいうまでもなく、『エミール』、『社会契約論』、『新エロイズ』などの代表的著述を貫くものである。

断片 2) 雄弁について (文 2, p. 205~206) ——「なぜある時代に雄弁は頹廢するのか、どうしてエスプリが悪趣味に陥入るのか、なぜ奇抜で誇張された修飾形式 (*figures bardies et outrées*) が時に悦ばれるのか」、これが問題として最初に示される。ルソーの答は簡単である。「人間の生活の在り方が、人間の話しぶりを規定する。各人の行為が各人の話しぶりに露われるのと同様に、弁論の趣味はその時の道徳、風習 (*moeurs*) に関係することが多い。」即ち雄弁の頹廢は生活と道徳の頹廢によるというのである。しかし、ルソーはいわゆる雄弁の頹廢が真の頹廢とは限らないということも感じている。そう見える話しぶりが実は「新しい趣味」を表わしている時もあるだろうし、一方「話しぶりの中で、幼稚なことばや悪いことばの使用、適度を超えた自由なことばの使用は、話しぶりが非常に流暢か

つ快適なスタイルを駆使するくせに、ことばの音響以外のどんな効果も意味しない場合よりは、大きな害がない」と述べて、形式よりも内容の重視を雄弁についても示している。この断片はかなり微弱ではあるがルソーの出世作『学問芸術論』(1749年)へと発展していく方向を感じさせている。

断片 3) 神について (文 2, p. 207~208)——「私たちは神の存在 (existence) をすべての人が説得されていると考えている。しかし、私たちがこの世界での生活の行為を支配する原理をもって、この説得に同意することは考えられない。」神についての断片はこういう文章で初まる。ではルソーは神を否定するのか、そうではない。ルソーの否定しようとするのは、神の本質から実存 (existence) のみを切離し、その実存を理性的に論証できるとする主張なのである。それは続くルソーの文章を見ればわかる。「神のイデーは永遠のイデー、知性と知恵と正義と力における無限のイデーから切離せない。この属性を神に認めないで神を把握することよりも、むしろ神性の感情あるいはイデーを自分の中で絶滅させる方が容易だろう。属性の総合が神が私たちのエスプリに現れる唯一の仕方を形成する。」要するに若いルソーは、価値と存在との一体としての神、一步進んでいえば、人格としての神を要請しているといえる。しかし、善なる神がどうしてこの世界に様々な悪と欠陥を生じさせるのか。「それは、神は人間を従わせるために、神の無限の力を使用しなかったに違いない」からとルソーはいう。人間の自由な行為を尊重するために神は全能の力をあえて行使しなかったという議論の立て方は、決して新しいものではなく古くから説かれてきている。しかし、だからといって、若いルソーが他人の説を丸写しにしていると見做すことも不当であろう。人間の自由、自発的行為の概念は政治、教育の側面においてのみならず、宗教においてさえもルソーが中心においたものであった。後年の『エミール』中における宗教論、即ち『サヴォアの助任司祭の信仰告白』においても、大筋において同様のテオデセーが展開されるのは、この事情のひとつの現れである。

いずれにせよ若きルソーは神を学問的認識の対象としてではなく、自由な主体たる人間と人格的に相對する自由で善なる絶対能動的存在として求め、信じ、祈る。「毎朝日の出前に起きる……散歩しながら私の作った祈りをとなえる。それはいたずらな口先の眩きではなく、眼下に美しくひろげられるあの愛すべき自然の、その創造主にむかっての、真剣な心の高揚とでもいうべきものであった(文 6, 中, p. 23).」ではその祈りはどんなものであったか。デュフルの推定によれば 1738 年から 39 年頃の作とされる祈りの短かい草稿が二つ残されている。時代順からすれば少し先回りすることになるがそれらを紹介してみよう。

祈り (I) (文 2, p. 221~223)——「偉大なる神よ、宇宙の創造者にして保持者よ、あなたに当然捧げるべき敬意を捧げるために、またあなたから受取るすべての恵みに感謝するために、私たちの祈りを捧げるため、あなたの聖なる現在の前に私たちはひざまづきます」このことばの後に『主の祈り』が続き、その後で再びルソーの祈りが継続する。「私の神よ、私たちは敬意と讃美とをあなたに捧げます。それを嘉して下さい。私たちはあなたの前で塵であり灰であります。ただ震えながら私たちはあなたの恐ろしい現存の前に身をおかなくてはならないはずです。」この辺のことばには、ルソーの育ったジュネーブを支配していたカルヴァン神学の影響が見られるといえないであろうか。しかしルソーの神はカルヴァンの神ではない。「あなたは威厳よりもはるかに多く憐れみの心を持っておいでです。私たちはあなたの無限の寛大さに信頼します —中略— 私たちはあなたが人間に与えるすべての恵みと善とに感謝します。」そしてルソーはルソー達を創造し、理性を与え、神についての認識を賦与したことを神に感謝し、最後に「私たち」即ちルソーとヴァラン夫人を相互に結んだことを感謝して、この祈りを終えている。

祈り (II) については、祈り (I) とほぼ同じ内容であるが、ただ祈り (I) の主語がただ一箇所を除いてすべて「私たち」という複数であるのに

対して、祈り(Ⅱ)の主語は常に「私」という単数であること、長さが約2倍に及んでいることが指摘されよう。

IV 若いルソーの読書の方向——この時期の作品による——

私は1735年ごろ、即ち23才ごろのルソーの精神生活にかなりの程度すでに立入ってきた。ここでは少し視角を変えて、この頃のルソーがどのような方向で彼の勉学を行なっていたのかを、どのような読書をなしていたのかを通して探ってみよう。それも『告白録』での回想によってではなく、その頃のルソーの書き残した直接の資料によってである。『告白録』の回想には多くの錯覚、誤りがあることは否定できない。たとえば読書に関しても、『告白録』でルソーは二度も強調してルシュール (Lesueur) の『教会と帝国の歴史』(Histoire de l'église et de l'empire) を8才～10才の少年時代に読んだと述べているが(文6, 上 p. 12 と p. 91), この本は1730年以前には公刊されていないので、ルソーの回想は間違っているといわれねばならない(文8, p. 4.)

幸いなことにルソーがジュネーブの本屋ジャック・バリヨール (Jacques Barillot) にあてた1737年7月付けの注文書があり、まずそれが利用できる(文1, p. 52～55)。それによると次の本が注文されている(綴りは原文通り)。

Hoffmanni Lexicon; Newton Arithmetica; Ciceronis Opera Omnia; Usserii Annales; Geometrie pratique de Manesson Mallez; Elemens de Mathem du P. Lami; Dictionnaire de Baile.

これは文末にまとめられたリストであるが、それより前に置かれている文章から補足すると、さらに Boileau の Oeuvres complètes; Prévost の Cléveland; Marivaux の La vie de Marianne が加わることとなる。

これらのリストにさらに大巾に書物と著者を付け加えさせる資料として、私たちは先にあげた『ヴァラン夫人の果樹園』(1737年末か1738年春

の作) という詩を利用できるのである。

『ヴァラン夫人の果樹園 (文 1, p. 351~366)』について

「私の心の友なる果樹園，純粹無垢の日々，天の与えたもっとも麗しき
 日々のはまれ，魅惑的孤独，平和の隠れ家；
 幸多き園よ，私は決してお前から離れえない。」

この切々たる感動的な句で初まる 10 節，156 行にわたる詩は，シャンブリー及びシャルメットにおけるルソーの内面生活の美しき表現であると共に，失われんとしているその樂園への哀愁と，未来への不安をほのめかしている。しかし，ここでは文学的価値などはひとまず置いて，読書関係の資料として扱ってみよう（有名な人名はカタカナで，余り知られていない人名は原語で示しておく。）

するとまず第 2 節の次の詩句が目につく。

「モンテーニュかブリュイエールを持ち，
 人間の悲惨を静かに笑う。

ソクラテスと聖なるプラトンと共にカトンの歩調で進むことを学ぶ」

第 3 節

「エーテルが私達を蔽うこの様々の世界の上で推理しながら私は Huyghens とフォントネルを読み進む」

続いて第 7 節には

ある時は新鮮な木蔭の下で憩い。

ある時はライプニッツ，マールブランシュ，ニュートンと崇高な調べに乗って理性を高め，

天体の思考の法則をさぐる；

ロックと共にイデーの歴史を語り

ケプラー，Wallis, Barrow, Rainaud, パスカルと共にアルキメデスを凌駕し……

ある時は物理現象に問題を適用してシステムの精神へと入る；

デカルトおよび彼の崇高だが軽佻なロマンと取組む。

直ちに私は不確実な仮説を捨て

博物学 (histoire naturelle) の研究にいそしむ。

そこで Plin と Nyeuventit が好意をもって、思考し、目を開き、見
ることを私に教える。」

という詩句が続く。もちろんあげられた著者のすべてをルソーが読んでいたとは断定できないし、何を讀んだのかも必ずしも明瞭ではない。しかしどんな人々にルソーが強い関心をもっていたかは判るし、また、後年のルソーの著作から推察して、かなりの程度にこの時期で独学が進んでいたことも確かではなかろうか。

次の第8節になると『テレマク』『セハス』『クレブランド』と本の題
があげられ「その中の自然は私の目には感動的で常に純粹だ」と歌われて
いる。そしてリストの最後を飾るものとして第9節では興味深い名前が列
挙される。

「あゝ優しいラシーヌよ、愛すべきホレースよ、

私の書棚をあなた方もまた占めている。

Claville, Ste Aubin, *Plutarque*, *Mezerai*,

Despréaux, Cicéron, *Pope*, *Rollin*, *Barclai*,

そして余りにも柔和な Motte と感動的 *Voltaire*, あなたの教示は心にい
つまでも親しく残るだろう。」

下線を施した人名は特にルソーとの関係で重要なものである。プリュタルク
の著書が少年時代以来のルソーの愛読書であり、その影響の深く強い
ことはここであらためて記すまでもないであろう。パークレーについては
『サヴォアの助任司祭の信仰告白』の中で明らかに関心をもっていたこと
が読みとれる。そしてヴォルテールについてはこの生涯の好敵手について
「いつまでも親しく残るだろう」と述べているのが、色々な意味で興味を唆
るのである。ポープについては彼の「存在の鎖」(chain of being) の思想

を『コンジェへの手紙』でルソーは詳細に批判している。ローランについては次節及び教育のメモとプロジェの箇所論じるであろう。

V 歴史への強い関心と三つの根拠

シャルル・ローラン (Charles Rollin. 1661~1741) は教育論と古代史の研究で有名であり、この両面で若いルソーに感銘を与えているが一応まず古代史家としてのローランとの関係を取り上げてみよう。

このことは同時に若いルソーの学問的関心の中心のひとつが歴史にあったことを明らかにすることと連らなるであろう。このことのために重要な手係りを私達はデュプールの見出した断片の6番目のものに見出すことができる。

『普遍的年代記、あるいは、世界の創造から現在までの時間の一般的歴史(ルソーが使用するために組み立てられ、仕上げられたところの)』と表題されているこの断片は1737年頃のものとして推定されている(文2, p. 213~220)。断片の初めの部分にこれが純粹に自分自身のためのものであり、公やけにするためのものではないことを記した後で、いわば、本論に入る。ルソーはまず「歴史は立派な人間(honnête homme)の勉学の基本的部分をなさねばならない」という主張をかかげ、この主張は「単純かつ賢明な二つの推論に基づく」とする。ルソーの根拠のひとつはフェヌロンの「私は私自身よりも家族を、家族よりも祖国を、祖国よりも人類を愛する」ということばへの共感と批判に結びつく。ルソーはもちろん「このような人類愛に満ちた感情はすべての人間に共通にならねばならない」と考える。しかしルソーは問う「私たち自身や家族に関係深いものを無視してよいのだろうか」と。ルソーの考えでは「世界は私たちがそのメンバーである大家族であるからこそ、私たちは世界家族の状況と関心を認識する必要がある」のであり、個を越えた全体への愛は個や特種を媒介としてのみ可能だということになる。「個の力がどれ程微弱でも、それが部分をなしている

全体の中にもつ何らかの場所により、いつでも有用性をもつであろう。」そして結局「もし個が全体に不可欠ならば、何が生じたのか、何が生じているのかを知らないで、またどこで、どんな自分の仕事が必要なのか、他人と自分のためにもっとも有効な仕事はどうするべきかを知らないで、どうして仕事ができようか」と問われる。そしてこの問いに答えるものこそまさに歴史なのである。いってみればこれは深い意味での実践上の効用という根拠である。

もうひとつの根拠はこれに対し道徳的なものである。「歴史の効用はエスプリと心情に対して比較し難く普遍的であり、社会の中で大きな影響力をもつ。」そしてこの後にシャルル・ローランの『古代史』からの34行に及ぶ長い引用が示されるのである。この引用の前半は大体ルソーのあげた第1の根拠と一致する。これに対し後半の部分は「歴史はそれにより摂理が全宇宙を導いているところの、神の偉大性、力、讃むべき知恵をいたるところで告知する」ことをもって歴史の意味としている。熱心なジャンセニスムの信仰をもっていたといわれるローランにおいては、道徳と宗教は離れ難く関連し、信仰を除いての人間形成はなかったに違いない。全13巻にのぼる『古代史』も科学的、客観的な認識よりも、国家と個人の栄枯盛衰を通しての壮大な道徳訓という趣きと狙いが強いといわれる。そして若いルソーはそうした意味でのローランにやはり共感を覚えていたのであろう。

さてほぼ「同様の趣旨を異なる日に公けにした」ラミ神父の『科学講話』(Entretiens sur les sciences)からのやはり長い引用と、ジルベール・シャルル(Gilbert-Charles)の『意見について』からの短かい引用により第1、第2の論拠を重ねて強化したあとで、ルソーはいわば第3の意味を歴史研究について述べている。それはいわば純粹に観照する喜びの対象として歴史をみるもので、ルソーがただ単に実利的、道徳的な立場でしか歴史を見れなかった人間とは違う点を示している。

「人間の第一の情熱のひとつは自分の回りのことを知ろうと努めること

である。しかし人間のエスプリの能力は自分自身についてだけで満足しない」というギヨン (Guyon) 神父の『キリスト以降の帝国と共和国の歴史』からの引用が糸口となり、ルソーは「趣味とエスプリの人にとり、歴史の方法で、記憶さるべきすべての事件に居合せ、この素晴らしい観物を楽しむためにそれらに達することは、どれほど魅力的であろう」と述べて、観照的歴史の喜びを語っているのである。

こうした根拠から、ルソー自身の勉学において歴史の研究がかなり大きな比重を占めることとなる一方 (ルソーの歴史に関する知識の広さと深さは『学問芸術論』『人間不平等起源論』などを始めとする有名著作中にいたるところで示されている。), 少年の教育においても歴史の勉強が重視され、カリキュラムの中でいわば中心部の地位を占めるように配慮される。(『プロジェ』の最終部分参照)

このことを見るためにも、私達は無名時代におけるもっとも長い作品であると共に、『エミール』との関係において教育論の展開を探るのに極めて興味深い作品である『サント・マリーの教育のためのプロジェ (計画案)』及び量的には半分程の『サント・マリーの教育の為に提示されたメモワールの断片』を研究しなくてはならない。

註: 念のために次のことを注意しておきたい。それは私がこの論文で扱っている『メモワール』はデュフル編のルソー書簡集第I巻に収録されているものであるということである。これとは別にガリマール書店のプレイヤード版ルソー全集の最新第VI巻には量と質で異なった『メモワール』が収められている。この二つの『メモワール』の関係について詳論することは時間的・頁数的にみて次の機会にゆずりたい。

VI 教育の『プロジェ』と『メモ』の構造分析と説明

シャンベリーやシャルメットでの楽しい日々は、ウィンツェンリードにヴァラン夫人の愛が移ったことと、ヴァラン夫人の財政的窮迫によって消えていった。ルソーはシャンベリーを去ってリヨンのマブリー氏の許でサント・マリーという男子の家庭教師になる(1740年4月～41年5月まで)。

J.-J. ルソーの無名時代の著作研究

この時期に記されたものが上述のふたつの作品である。この中まず量的に短かく、内容から見ても先に書かれたと思われる『メモワール断片』から扱っていくことにしよう。

A. 『メモワール (文 1. p. 367~387)』の構造と内容——内容は大きくわけてまずふたつに区別されうる。第1部分は教育の目的に関する考察であり (p. 367~376), 第2部分は自分の性格に関する分析である (p. 377-387)。

まず第1の部分では直ちに青年の教育の真の目的は何かが問われる。ルソーのそれに対する答えは簡明であった。「それは幸福にすることである。様々の提案はこの目的に達する手段の多様性にすぎない (文 1, p. 367)。」ルソーは続けて幸福または至福 (*felicité*) に達するにふたつの道があると指示する。「ひとつは情熱 (*passion*) を満足させる道であり, 他のひとつは情熱を緩和させる (*modérer*) 道である。」しかし, このふたつの道は全く対立する。そこでどちらかを選ばなくてはならないが, 両方の結果を比較すれば答えは明瞭であるとルソーは考える。即ち第2の道が選ばれるべきである。それは「全情熱に身をゆだねる人間の状態は理性的人間にとりひとつの幻想である」からである。「社会の中にいる一匹の熊のように, 自己の欲望の充足のみに心を奪われ, 他人の安寧と憩いを考えない立派な人間が何処に居るであろうか?」人間は自然の中に独りで生きているのではない。人間は社会の中で生きている。この認識がルソーをして欲求を緩和, 抑制する方向にのみ, 真の幸福があると論断させるのである。

しかし, これだけでは社会に生きる事は, やむをえない事態なのか, それとも積極的な価値をもつ事態なのかが明らかではない。そして実はこの事に関するある曖昧性は, ルソーの生涯の著作を通じてやはり現れているように私には思われる。それはともかく, 以上の認識は当然教育的配慮の上に反映されてくる。ルソーはまず孤独の中にイマジネーションにより世界を考え, 欲望を形成した人を想定する。「このような人を一度に社会の中へ移してみるとする。見なれている対象として他人が驚かないような対象

に、彼はいちいち動かされる……反省の自由さえ奪われて、彼は滝のような異常な感情に押し流されてしまう。」ところがこれに対して、小さい時から世間にゆだねられている人を考えると、長い習慣から、快あるいは不快のたくさんの対象にも彼は刺激されない。「心情は確固としている。エスプリが対象を見なれているから。」

こうして次の教育上の原則が示される。「世間で役目を演じる (figurer) ように定められている人間は、なるべく早期から世間へと導かれるのがよい (文 1, p. 371).」これをややあとの場所でルソーは「サント・マリーにできるだけ早くから社交の趣味 (le gout de la société) を与えるようにすすめる」という表現でも示している。

しかし、早期社会化教育を推奨することは、社会がよい影響を少年の上を与えることを信じていなくてはできない。そして若いルソーは事実、「世間は怪物ではない」と記している。「私はサント・マリーが、世間を立派な人間の集合と認めるように望む。もちろん悪徳や弱さもあるが、底には節制と名誉の原理が消えずにあり、人々を遅かれ早かれ知恵と徳に導くのが社会である (文 1, p. 372).」、『契約論』で構成されたような理想の社会、あるいは『ポーランド統治論』や『コルシカ憲法草案』で構想されたような、理想にかなり近い社会における早期社会化と、現存社会での早期社会化とはかなり異質のものがある筈である。この異質性が表面に出ていないのは、若いルソーの現実認識の甘さのゆえか、それとも一種の戦術なのか、あるいは、すでにルソーの頭の中では理想の社会のみが語られているのか。恐らくこの三つの理由がそれぞれにある程度あてはまるであろう。どれかひとつの要因で割切るのはルソーを解する上では殊にふさわしくないと私は考える。

さて第2の部分の自己分析は、サントマリーを早く社会、世間へ出すことをすすめる自分が、と実はその点で不得意であることの弁解から始まる。そしてルソーは自分の性格特性として次の三つを挙げるのである。

J.-J. ルソーの無名時代の著作研究

1. メランコリー，原因のわからぬ悲哀
2. 人前での臆病さと無器用さ
3. 成功や出世への無関心（ただし親しい人からの称讃は嬉しい）

ここに私達は若い（といっても30才近い青年後期の）ルソーの自己分析が、後年の『告白録』や『ジャン・ジャックがルソーを審く』などにおける自己分析と基本的に同一の姿を描いていることを確認できるのである。

B. 『プロジェ』の構造と内容（文 3, p. 373~400）——原文は章節の区切りのない76頁程のものであるが、明確な把握と理解のために章節化してみながら研究してみたい。すると全体は序章的第1章と本論的第2章に大きく分れる。

第1章： 家庭教師の権能と役割（p. 373~382）

第1節： 父親への挨拶（p. 373）

第2節： 教師の権利の程度の間（p. 334）。「彼ら（子どもたち）について、あなたが私に与えるつもり of 権威の程度について、また、賞罰に関してどの程度の権利を私にゆるすのかを明らかになさって下さい。」とルソーはまず要求している。

第3節： 教師が高い権威をもつ必要性（p. 374~375）。教師にふさわしい）権能が父から与えられない時、いかに教師が努力しても成功はおぼつかないとルソーは説いて、その理由を三つあげている。理由 1) 子どもにどんな種類の権利も持たない成人は「授業を楽しくするためにも束縛を与えるためにも」威信を持ってない。なぜならば「どれほど早熟でも、ある年齢では子どもは感覚の印象に基いて大半の行為をする」からである（『エミール』と一致）。理由 2) 叱る権能を持たない教師は、ひとつにはいちいち父母をわずらわす面倒さを避けるために子どもを見逃しがちとなる。またひとつには、適正な時期に賞罰を与えられなくなる。「他の瞬間では、その事へ戻るのは適当ではありません。子どもの観念の変化は、有益だったことも有害にするかもしれないのです。」ここには、教授における速やか

なフィード・バックの重要性を説く B. F. スキナーらの理論を先取している指摘があるといえる。理由 3) 教師の無権利をすばやく悟る子どもは、結局教師の禁止や指図を無視するであろう。

第 4 節： 体罰への原則的反対と個別的適用 (p. 375~376). 教師のためにも生徒のためにも子どもを打つことはよくない。「私はいつでもこういうやり方に反対してきました。」しかし「サント・マリーについていえば、必要によっては鞭打つことも間違いではありません。」サント・マリーはやや後にも記されるが、「活潑なエスプリ」をもった、我がままな子であったようである。

第 5 節： 教師と父親との連けい (p. 376~378). 以上説いたように、教師には賞罰の権能ができるだけ賦与されるのが望ましい。しかし、父親は、例えば、ごほうびを与える権利を独占したいかもしれない。そこでルソーは実際的な知恵と教育的配慮をこめて、父親と教師の連けい作業を次のように提案する。父親は「1) こどもにご馳走する前に、教師が子どもの行為に満足しているかどうかたしかめること。 2) もし子どもがお菓子を欲しい時は、必ず教師の口を経て要求する必要があること。 3) 父親への教師の批判を採り上げること、 4) もし教師が反対するなら、子どもにお菓子を与えることを拒むこと。」以上の条件を示したあとでさらに若いルソーは次の意味深い文章を書いている。「人が何かほうびを子どもに与える時、それは子どもが義務を行ったからだということを子どもに説明することは、場合によっては全然必要ありません。むしろ、子どもがほうびとお菓子は親たちの知恵と善行の結果と考え、思いつきの任意のもので、決して勉強と徳の目的としても賞としても与えられるものではないとみなすようにすることがよいのです。」私たちはここにも『エミール』につながる、教育的英知を見うるであろう。

第 6 節： サント・マリーとコンディアックの個性 (p. 378). ここでコンディアックはおとなしい「けしかけられる」必要がある子なのに対して、

サント・マリーは「抑制できるたずなをはめることが教育の決戦である」
ような子であることが描かれる。

第7節： 今迄の論旨の反復とこれまでのルソーが受けていた処遇への批判 (p. 379～381). 「私は私の授業への完全な抵抗と、私に対する過度の無視を初めに見出して、 どうしたらよいか分かりませんでした。」ルソーは卒直にこう告白している。そして続けて「彼（サント・マリー）は私を無視しながらパパの側に、打ち破れない避難所を求めて走ります。そこで彼は多分好きなようにお話をするのです。」と批判している。そして新しい年からやり直すために、父親が子どもに次のような講話をするよう要請するのである。

第8節： 教師の権威を示すための父親の講話 (p. 381～382). まず実例を示して自発的勉学意欲をそそることをルソーは要請する。次に「彼の目の前で彼についての権威を私にゆだねたいことを言明して下さい」しかしルソーは最後にこう述べている。「この言明はただ子どもに生々とした印象を与えるためにほかならないのであり、個別にあなたが私に指示なさることに応じる以外の結果をもたないのです。」

こういう準備がととのって初めて教育の内容方法が説明される。

第2章： 教育の目的・方法・内容 (p. 382～400)

第1節： 教育の目的とその達成順序 (p. 383～385). ルソーは最初に「このプランはサント・マリーの性格とあなたのお考えについて、今迄知りえた限りの事から考えたものです。」と述べて、このプランが必ずしも一般的ではないことを断わっている。『エミール』での教育と異なる点があるのも、ひとつにはこういう要因、あるいは具体化のレベルの差が影響しているの見逃してはならない。しかし、この節に関してはルソーの言明はかなり一般妥当性をもち、そして、『エミール』での教育と根本的にはきわめてよく照応するものを示している。「青年の教育において人が提起せねばならぬ目的、それは彼の心情 (coeur), 判断力 (jugement) エスプリ

を今名前をあげた順序で形成することです。」この明確な言明のあとで、一方では「科学の獲得と詰込みをもって、よい教育の唯一の目標 (object) とみなしている」多数の教師とペダンチスト達を、他方では勉学を軽視してしつけのみを重んじる多くの父親たちを、共に誤まっているものとする批判が続く。「この二つの極端の間に、私たちは子どもを導くための正しい中庸をえたいのです……科学は無視されてはなりません。しかし科学は道徳 (moeurs) に先立ってもいけません。……性格は早くからきまってくるものなのです……もし人間が心情を腐敗堕落させる不幸をもつなら、腕の中の武器と同じように、科学は頭の中で恐ろしいものとなるでしょう。」

第2節：教育の方法 (p. 385~389). どうやって目的を達成するのか。「法や義務を知り、好むようにエスプリと心情を向けさせるべきです。それも機会がそれを自ずと発展させるように出現するのに対応してです。」「同じ成功に達する道が二つあれば、私はいつでも生徒に苦痛の少なく、より不快でない道を選びます。」こうすることで、1) 子どものエスプリを不快にせず、子どもの健康を害することがない。2) 子どものエスプリを早くから結果と効果によって事物を反省し、考察することに馴れさせる。3) 子どもに自然科学への興味と好みを吹きこむ、という利点をえられる。ルソーは次にこういうやり方が、決して自分が楽をしたいからではないと弁明し「いつも厳しい、怒ったような顔付をして、そうすることで生徒の犠牲において」よい教師だという評価をかちうるべきではないと思うと述べている。

ただし厳格さが必要な場合もある。それは「道徳 (moeurs) が攻撃され、悪習を直す場合です。」そしてここでルソーは具体的には「下の者に対する軽蔑、上の者に対する不従順、等しいものに対する無礼」をあげている。

「心情の正しさ (droiture) は、もし理性作用 (raisonnement) により強められる時は、エスプリの正しさ (justesse) の源泉です」又「良識はエスプリの光よりもむしろ心情の感情に依存するように思われます。」そこで

やはりモラルの教育が第一に置かれるべきこととなる。ただしこの場合、モラルは一種の人間知というニュアンスをも持っていることが注意されねばならない。

いずれにしても、それらの教育に際して、「しばしば相談するという風を試みせる」ことが、「たくさんの事を、しかも非常に大きな成功をもって」することの要諦であると、ルソーはすすめる。「規則的勉強では一年かかってもできないことを、こういう会話のやり方で二時間で学ぶ」というあたりには、やはり『エミール』の教育が強く予示されているといえよう。ただしこのやり方の利点のひとつを「虚栄心にうったえる」ことにおいているのは、『エミール』では批判するロックの教育論の影響をまだ脱していないというべきであろうか。

第3節： 社会(交)性の育成 (p. 389~390). ここで前記の『メモ』におけると同様に、早期からの社会性育成の方針が説かれる。ただここではもっと具体的に、適当な社交場としての二三の家庭の紹介を求め、しかもそれらの家庭での交わりにおいて、父親の姿に頼らないよう、その威光の陰にかくれないようなやり方の必要性を、細かく指摘し配慮している。

この辺りは若いルソーのかなり深い実践的英知が示されているといえよう。

第4節： 学問の教授 (p. 391~392). 性格の教育、早期社会性養成が、けっして学問・知識の教授の軽視ではないことを、ルソーは再びここで説く。「勉学の不利益をいかに語り、その必要性を否定し、悪い結果を誇大に語ろうとしても無駄です。知ることはいつでも美しくかつ有用です。」もし不都合が生じるとすれば、それは勉学そのもののせいではなく、「主題の悪い処理のせい」である。このルソーの文章は『学問芸術論』を読む上でひとつの示唆を与えるであろう。

第5節： モチベーション (p. 392~396). 「しかし、あなたのお子さまの中に、どうやって学問の趣味を生じさせるかが問題なのです。」サン

ト・マリーは学問に対して「はなはだ強い嫌悪を示している」とルソーは続けている。この嫌悪の根源は兄弟姉妹間でのおしゃべりの魅力にあると、ルソーは診断する。けっして勉学自体が嫌いなのではない。したがって「勉学する場所で彼が心地よく感じることをできさせたならば、それだけでかなりの獲得でしょう。」そのためにルソーはサント・マリーの好奇心を刺激する細かい配慮を考える、「小さな宝石、切抜細工、音楽、道具、プリズム、虫目がね、天日取目がね、その他たくさんの小さな好奇心をそそるものが、次第々々に彼を室に引きよせ、遂には他のどこよりもそこを気に入るまでにさせる」やり方が示される。

ところで、こういうやり方が成功するためには、親の協力が必要である。とくに「勉強時間にあなたの所へ逃げこませないように」「勉強時間を他と比べることのできない重要なものとみなさせるように」と、ルソーは注文する。こういう注文はすでに述べられている、教師と親との連けいの不可欠性の指摘の再確認へと進む。教師と親の間の特別なサインなどについて、ルソーは念入りに、しかも押しつけがましくなく命令的でもない調子で語っている。

第6節：教育課程 (p. 397~400)。こうした長い教育的配慮の叙述と要求の後に、初めていわばカリキュラムの構想が述べられる。「勉学の順序に関しては初めの2、3年は非常に簡単です。ラテン語と歴史と地理の初歩が彼の時間を占めます。」そしてラテン語の勉強については、シャルル・ローランの方針通りに「勉強を好まれるものにするため」作文を課さないという。それはまたサント・マリーの軍人という将来の経歴を考慮しての方針でもある。歴史については、「ふつうの勉強プランと異なり」「古代よりもはるかに現代史を重視する」という点、修辞学、論理学、スコラ哲学はあまり必要ではないが、「もし時間があれば、『ポール・ロワイヤルの論理学』と、わけてもラミ神父の『語る方法』を読ませる」と述べる点が注目されよう。博物学 (histoire naturelle) は『エミール』でと同様にここでルソーの

重視する学科である。「私は彼を博物学の中に2, 3年間, 自然の大景観の講義により導き入りたいと提案します。」自然の中での実物教授は, ここでもやはり語られているのである。『ヴァラン夫人の果樹園』の第7節にもルソー自身博物学を好んだ事がうかがえる。そして数学(1年間)と物理の勉学もプランされている。そして最後に生徒がまだルソーの手許に居るならばという条件下で, 「私はプーフェンドルフとグロチウスの講義により, 道徳と自然法(droit naturel)のいくらかの知識を彼に与えたいと思う」と述べ, 「立派な人間, 理性的人間の尊厳」である「善悪の原則の認識」と「社会の根底の認識」を与えたいと主張している。一方, ルソーは批判, 詩作, 文体, 雄弁, 劇, など「趣味を形成し, ほほえましい様相の下で勉学を呈供するすべてのもの」を「人が belles-lettres と呼ぶ楽しいリクリエーション」とするようすすめている。

そして最後に, 歴史をカリキュラムの中心にするという主張を, 次のように述べて締めくくりとしている。「こうしてひとつひとつの諸科学を続いて学ばせながら, 私はすべての勉学の基本的目標として, また, 全科学の上に遠く枝を伸ばすものとして, 歴史を見失なわないでしょう。」

しかし悲しいことに, このプロジェクトが実際にそのまま使用される保証は, どこにもなかった。むしろサント・マリーの教育プロジェクトは, 彼の叔父の手で立てられ, ルソーも従うように要求されるらしいことが, 末尾の文章で明らかとなっている。それにもかかわらず, これだけのものをルソーはマブリーに提出せずにはいられなかった。そこに私たちは若いルソーの抱負, 自恃心, 誠実性, 口惜しさなどといったものを, 行間に感じるるのである。

註: John S. Spink もまたプレイヤー版ルソー全集 IV 巻の序文の中で『プロジェクト』の構造を分析し, 紹介している(p. XXXV~XXXVIII) 私の構造分析とは別のものであるから, 興味のある方は参照されることをすすめる。

VII 暫 定 的 結 語

1 年あまりのリヨンでの家庭教師の仕事はあまり成功せずルソーに一種の失意をもたらした。それには色々の理由があろう。しかし根本的には、ここで理想家、夢想家、自然の住人であった青年ルソーが、初めて都会的現実に直面し、その威圧を体験させられたことに、その深い理由があると私は考えたい。しかも青年の自負をくだかれ、現実の壁の厚さを知ったルソーの背後では、再び帰るべき楽園の扉はすでに閉されていた。

『ボルドー宛ての書簡詩 (1741年)』『コンジェ宛ての書簡 (ポープの『人間論』について) (1742年)』『パリソ宛の書簡詩 (1742年)』には、この時期のルソーの不安と憂うつ、現実への怒りと決意が反映されている。しかし、「貧しさの支配するところに知恵はない」「理性は決して時間と永遠、有限と無限の間に関連を見出すことはできない」「階級間により少ない不平等をもたらすことは社会にとりよくない」などの注目すべき言明を含むこれらの作品を分析、研究し、あわせて無名期の作品全体を通じてえられる、若いルソーの思想構造と思惟方向に関して総括することは、紙数の制限により次の機会に譲らざるをえないのである。

VIII 文 献 表

- 1) Correspondence générale de J.-J. Rousseau (par Th. Dufour, Librairie Armand Colin, 1924) Tome I (この中には 1935年付「父への手紙」1737年付「バリヨーへの注文書」「ヴァラン夫人の果樹園」「サント・マリーのためのメモの断片」などが収められている。)
- 2) Annales de la Société J.-J. Rousseau (Genève, Tome I, 1905) (この中にはデュフルにより見出されたルソーの無名時代の断片が収められている。)
- 3) Œuvres complètes de J.-J. Rousseau (Dalibon Libraire, 1826) Tome III, (この中に Projet pour l'éducation de M. de Sainte-Marie が収められている)。
- 4) J.-J. Rousseau Œuvres complètes (Bibliothèque de la Pléiade. Tome I,

- 1959) (この中に「告白録」がある).
- 5) *Émile ou de l'éducation* (Cassiques Garnier, 1961).
 - 6) 『告白録』(井上究一郎訳, 新潮文庫).
 - 7) 『エミール』(今野一雄訳, 岩波文庫).
 - 8) F. C. Green: *J.-J. Rousseau* (Cambridge U. P. 1955),

The Study on Writings of J.-J. Rousseau in His Nameless Period

Akira Inoue

Résumé

- Chap. I The Aim and the Content of My Study.
- Chap. II Self-Analysis and the System of Learning—A Letter to His Father.—
- Chap. III Three Fragments and Two Prayers.
- Chap. IV The Books and Writers Read by Young Rousseau.
- Chap. V His Interest for the Study on History.
- Chap. VI The Analysis and Interpretation of His Educational “Project” and “Memo.”
- Chap. VII Tentative Conclusion.
- Chap. VIII Bibliography.

Recently I have begun to be more aware of the importance and variety of what J.-J. Rousseau (1712-1778) wrote before 1749. Renewed inquiry into the writings of young Rousseau seems necessary to a better comprehension of his later works. But very few readers have paid serious attention to the earlier fragments on history, religion and education; the poems and the long letters to his friends. In these papers, therefore, I try to study these fragmental writings from 1735 to 1742. The vicissitudes of those years are narrated in Books V, VI of the “Confessions.” Within this seven years span,

two places are decisive in its influence on the intellectual and emotional development of young Rousseau: Les Charmettes and Lyon. The former is the symbol of the lost paradise of man as he moves from nature to society. Rousseau would like to remember the time of Les Charmettes as a heaven of happiness, for it was a time of solitude, of manual work in the garden as well as of intensive work of the mind. The latter was the large city where the opulence of civilization and commerce was displayed. There he taught two children as their tutor and made "project" and "memo" of remarkable value.